

山形県現代俳句協会会報

第31号

令和6年12月

継続は力？

堀 尚子

「継続」は好ましいことではあるが「力」に結びつくかどうか確信が持てない。私の俳句について言えば、「今まで何をやってきたの？」と言われても仕方がないほど力がないからである。

パソコンに保存してある俳句控を開いてみると、最初は一九九六年十二月の句である。この年は初雪からどつさり降った記憶がある。

ふうはりと降りても雪の重きこと

この頃は俳句が何であるかは全く分からず、あまり悩まずに作っていたようだ。今は悩むことばかり多くなってしまう、例会や俳誌の締め切りに追いかけて苦し紛れに作っている。

句帳が残っているのは二〇〇二年からである。試し刷りやミスプリントの紙がどうしようもないほど溜まるので、袋とじにしてきれいな包装紙などで表紙をつけて句帳にしたものを使い続け、大した冊数になっている。もとお金をかければもう少しましな句帳が出来たかもしれないが、自分でメモを書き、推敲を繰り返した跡を見るとずっととっておきたくなる。

句帳を読み返してみると作品の良し悪し以外に、気付くことがある。日常の些細な出来事や季節の移ろいを詠んだ句に、その時の自分の姿が透けて見えてくるのだ。同じ雪や花でも、年齢によって違ってみえていたようだ。そして、母、義母、夫の死など、人生の大きな出来事も次々に起った。それらが五七五の短い詩となって残ることにより、日記を書かない私の足跡になっている。

俳句によつて知り合った方、今も句座を共にしている方々にはご指導をいただいたり励まされたりしてきた。故人となられた方も多く、古川京子さん、高田廣稲子さん、難波次郎さんなど地元鶴岡だけでも十人を数える。俳句を語ったときの顔や声を思い出して懐かしさと寂しさがあふれる。ずっと続けてきたから出会えた方々であり、この出会いがなかったら一人ではとても続けることはできなかったと思う。

これからどれくらい、健康で生きていられるかわからない。でも、足跡を残したい。もはや上達することは期待できないが、俳句とはずっとお付き合いすることになると思う。この冬は素敵なお雪の句を作れたらいいと思う。

現代俳句の秀句を読む 8

目つむりていても吾を統ぶ五月の鷹

寺山修司

この句を青春の記念碑と捉えて若い頃から仰ぎ見てきた。

青春期、人はさまざまに思い悩む。自分の将来が見通せない不安、そのまま進んでも果たして着地点はどの辺りなのだろうか？一年先も遠くに感じる。などなど：

そんな時、飛翔する鷹の荘厳な姿が私の目裏に浮かぶ。

鋭い眼光、大きく強靱な嘴、他を圧倒する肢体は五月の空、すなわち青春の吾を統治し、先導して呉れるようだ。

私は迷うことなくその支配下に身を置き、一切を委ねて道を進むのだという決心が読む者に伝わってくる。

鷹という対象物を賛美し、憧れるに止どまらず、人の精神とのかかわり合いへと深く踏み込んだ定型短詩の作品を、私は他に知らない。

東海林光代



県現代俳句協会吟行会

十一月十日(日)、山形市の洗心庵で七名の参加により吟行会が開かれた。素晴らしい晴天に恵まれ、美しい庭園と歴史を感じさせる石造の美術品を眺めながら句作に没頭した。

昼食を頂いた後、庭園が見える明るい部屋での充実した句座になった。

大類つとむ会長が山形新聞の俳壇の選者に就任したお祝いも兼ねて行われ、真っ赤な薔薇の大きな花束が贈られた。心が洗われるような吟行の一日であった。



予想しなかった花束に、薔薇が大好きな会長は大喜びであった。

1 紅葉の一樹とゆれず人動く 大類つとむ

2 不老門ありしあたりの返り花 堀 尚子

3 散紅葉夢の欠片を拾はんか 木嶋 玲子

4 古を語るキシタン燈籠紅葉映ゆ 東海林光代

5 飛び石に穴の二つや秋の水 松浦 廣江

6 洗心庵名前ピタリと杜鵑草 阿部 雅子

7 鯉肩を寄せ小春日の水の音 佐竹 伸一

8 保育所の楓いちばん紅葉す 大類つとむ

9 ふつらの鯉の背中にもみぢ散る 堀 尚子

10 鴨鳴くや閑守石の置かれたる 木嶋 玲子

11 地下水の温みに池の鯉静か 東海林光代

12 膝立ての観音座る秋の庭 松浦 廣江

13 唐代菩薩童子らぐるり冬日差す 木嶋 玲子

14 風を読み切りしシャッター庵紅葉 佐竹 伸一

15 待合にまだ濡れている落葉かな 大類つとむ

16 秋うらら戸を開け放つ句会かな 堀 尚子

17 小流れの緩き静寂や返り花 木嶋 玲子

18 霧晴れて洗心庵に和むとき 東海林光代

19 江戸春日燈籠に皿秋の昼 松浦 廣江

20 ちよこちよこ冬の小蠅ら不老門 阿部 雅子

21 西を向く小さき石佛散紅葉 佐竹 伸一



【特選句作品鑑賞】

1 紅葉の一樹とゆれず人動く 大類つとむ

手入れの行き届いた洗心庵の庭園は、静かであった。よく晴れて風もなく「一樹とゆれず」、吟行の人や観光客が静かに動いていた。この静と動の対比を詠んで不思議な世界を作り出し、強烈なインパクトを与えている句である。作者の力量に感服した。 堀 尚子

多くの石が配され、小流に落ちる葉、池に遊ぶ鯉、晩秋の昼の一日。足音もたてずに楽しむ人が多くみられた。その庭に大樹が数本悠然と構えている。恐ろしいほどの静けさ、人がゆったりと動く中に、色づいた葉を付けた樹がびくともしない。作者は静と動を見事なまでに捉えた。数日が過ぎても脳裏に焼きつき余韻のある作品となった。 松浦廣江

7 鯉肩を寄せ小春日の水の音 佐竹 伸一

小春日の長閑な景である。鯉が肩を寄せ合っているという擬人化があたりかたかく、浅い流れの響きが密やかで「水の音」が利いている。読み手を、ゆつたりとした気分誘う好ましい一句である。 東海林光代

8 保育所の楓いちばん紅葉す 大類つとむ

吟行地の洗心庵に隣接して幼稚園がある。当日は日曜で園児たちの姿は見る事が出来なかったが、園庭にはカラフルな遊具が設置され

ていた。その一隅に大きな楓の木が紅葉していた。幼児のみじ手を連想し、登園した児等が「うわ！きれいだね」と落ち葉を拾い合う様子が目に浮かんだ。いやそんな児等であつて欲しい。
木嶋玲子

9 ふつぐらの鯉の背中にもみぢ散る 堀尚子

数年前なら木枯しや雲の時季であるが、地球温暖化で未だ秋本番の洗心庵。赤や黄緑のグラデーションの樹木を巡ると池の水音の心地よし。地下水ならではの最適環境で悠々と暮らす錦鯉。その体付きや色合い、目の優しさに癒される。その背にはらりと散りゆく紅葉の動きも捉えて詠み込んだところに引かれた。
阿部雅子

12 膝立ての観音座る秋の庭 松浦廣江

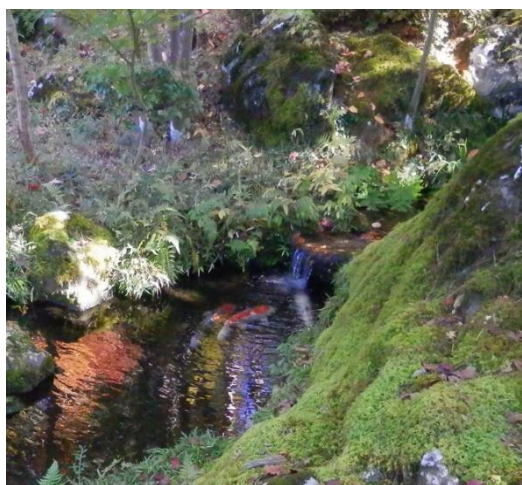
膝を立てた観音様と言うとすぐに浮かぶのはもちろん如意輪観音であろう。私も室生寺のそれが大好きである。吟行会の中で私はこの観音様を見逃してしまつたが、当日の空気がよく表れていると思う。衆生を救い願いを満たすという仏様を、紅葉の採光がまばゆい庭に見つけた喜びと、「膝立て」の発見が臨場感を持って伝わってくる。生意気ながら「の」を「て」に、膝立てという事はもう坐っているとわかるので「座る」を「在す」にして、「膝立てて観音在す秋の庭」としたらどうだろう。
大類つとむ

20 ちよこちよこと冬の小蠅ら不老門 阿部雅子

洗心庵に「不老門」と刻まれ、先端が兜巾のようになっている御影石の石柱がある。わかもと製菓の創業者の庭園から移設されたものであり、門をくぐったものは老いることがない（長生きする）という意味を持つ。この門に集まり、忙しく飛び回ることもなく、ちよこちよこと周りをたむろする数匹の冬の小蠅。不老門の言葉が醸す小さな空間で、けなげに生きる蠅達を見つめる作者の優しさが伝わってくる。
佐竹伸一

【選句結果】

- 五点
1 紅葉の一樹とゆれず人動く 大類つとむ
- 四点
8 保育所の楓いちばん紅葉す 大類つとむ
9 ふつぐらの鯉の背中にもみぢ散る 堀尚子
12 膝立ての観音座る秋の庭 松浦廣江
17 小流れの緩き静寂や返り花 木嶋玲子
- 三点
5 飛び石に穴の二つや秋の水 松浦廣江
7 鯉肩を寄せ小春日の水の音 佐竹伸一
20 ちよこちよこと冬の小蠅ら不老門 阿部雅子
- 二点
4、18 東海林光代 16 堀尚子
- 一点
2 堀尚子 3、10 木嶋玲子 11 東海林光代
15 大類つとむ 21 佐竹伸一



小流れの落ちるところに鯉が集まっていた。鯉の句が3句も生まれた。



皆さん真剣に、和やかに。小春日の句座が盛り上がった。



名勝「大沼の浮島」と俳諧

佐竹 伸一

しま遊ふ(ぶ) 夢の行方やつゆ時雨 鸞窓らんそう

大沼の浮島の湖畔に芭蕉塚がある。表には芭蕉の辞世の句とも呼ばれる「旅に病(ん)で夢は枯野をかけ巡る」。その裏面にあるのが本句である。

鸞窓は、大沼山主別当大行院十八代(1716~1788年)雄英の俳号。塚は、桃青翁(芭蕉)三世と称したとされるほど芭蕉を敬愛して止まなかった彼が、1771年に建立したものである。鸞窓は地方俳人でありながらも、全国に名の知れた俳人であった。大沼は、徳川家の祈願所たる御朱印地。修験の代表者として、彼の勧進の旅は俳諧の旅でもあり、多くの俳人との関わりをもたらしたのであった。鸞窓によって奉納された俳額には、日本各地の俳人による俳句が並ぶ。朝日町の文化財に指定されているこれら俳額は、鸞窓と俳人達の交流の賜物である。

さて、大沼の浮島が国の名勝に指定されたのは大正十四(1925)年十月八日。来年が百年の記念の年となる。指定発表時の文書には、「是等ノ島嶼ハ風ナクシテ、徐々種々ノ方向ニ運動シ、或時ハ池辺ニ留マリテ静止シ、再ビ運動ヲ越シ奇観極マリナシ」と記されている。

かつて、大江家、最上家、徳川家の祈願所として庇護を受けてきたとは言え、その存在が広く世

に知られることになったのは鸞窓以降である。

彼の俳諧との関わりで大沼を訪れた俳人の中に百井塘雨(？~1794年)がいる。ほぼ全国を行脚した塘雨は自らの紀行文を集めた『笈埃随筆』の「大沼山浮島」の項に、「そもそも此山上に扶桑第一の靈驗地あり。かかる辺土遠境なれば、諸国の人多くは参詣せず。故に其奇瑞をしらず。」と記している。この知る人ぞ知る程度であった大沼の浮島を広く世間に知らしめたのは、橘南谿の『東遊記』。これは今で言えば旅行ガイドブックの先がけであり、『西遊記』と共にベストセラーとなったものである。橘南谿は『笈埃随筆』から引用して大沼の浮島を『東遊記』で紹介したことから、大沼の浮島はその後多くの人の知るところとなった。その後は、かの小林一茶までもが、「浮島やうごきながらの蝉時雨」と浮島を想像して句を詠むほどに、大沼の浮島は知られた存在となつていったのである。来年の百周年記念事業では、是非とも俳諧(句)に光を当ててほしいと願っている。



朝日町の観光スポットの一つ。森林に囲まれた湖面には、風の有無に関わらず、大小様々な浮島が浮遊する。その奇観が大沼の神秘性を高めてきた。

編集後記

会報の作成に携わるようになってから、会員の方の存在を身近に感じるようになりました。総会や吟行の様子だけではなく、ほかの記事も興味深いものがあります。特に、「現代俳句の秀句を読む」は八回続いて勉強になります。次の会報を楽しみに待つほどになれば嬉しい。

早く投稿してくださいました皆様ありがとうございます。
松浦廣江

吟行会の日は十一月とは思えない暖かさでしたが、十二月に入つてめつきり寒くなりました。この号を皆様にお届けすれば今年度の事業は無事に終わります。

会員の高齢化が進み、顔を合わせることで益々難しくなっていますが、会報は心を通わせる手段の一つになり得ると思えます。皆様のご協力をお願いします。

堀 尚子

会報31号 令和六年十二月発行
発行人 大類つとむ
発行所 山形県現代俳句協会
〒九九七-四二二七
尾花沢市中町五-二〇
〒九九〇-一五五二
朝日町常盤に五二-一
事務局 佐竹伸一